報告

原子力シニアネットワーク連絡会(SNW) 第14回シンポジウム

原子力は信頼を回復できるか？

原子力シニアネットワーク連絡会 針山 日出夫

今年8月3日、東京工業大学デジタル多目的ホールにてSNW主催の第14回シンポジウムが開催された。これまでは、原子力の有すエネルギー安全保障上の普遍的有利性を根拠とするわが国のエネルギー政策や安全確保の在り方などに着目したSNWシンポジウムの企画を多く手がけてきた。一方、東電福島第一原発事故で国民の反原発感情は決定的に増幅され、今日になってもなお多くの国民が原子力の安全性、信頼性に対し懸念を抱き、原子力発電所の再稼働に違和感や疑念をもっている現実がある。今回のシンポジウムでは、一般市民と原子力界の間のコミュニケーションや安全認識などにまだまだギャップがあることを真摯に受け止め、原子力の利活用にはまず国民の信頼回復が最優先との視点に立って国民目線のテーマ設定を行った。原子力が国民の信頼を損ねた原因は何か、信頼回復には何が必要か、原子力界は何を反省すべきか等を踏まえて今後の原子力の進め方について各界の有識者から貴重な意見を頂いた。今回はこれまで最多の250名の原子力関係者と市民の方々に参加いただき盛会裏に終了した。

1. シンポジウム概要

斎藤伸三 SNW 会長の開会挨拶の後、JR 東海会長葛西敬之氏による「日本のエネルギー政策～原子力の役割」と題する基調講演が行われた。要旨は2.項に後述する。

引き続き、「原子力の信頼回復」というテーマで小出重幸氏(日本科学技術ジャーナリスト会議会長)を座長に、以下5名のパネリストによるパネル討論が行われた。柿川尚史氏(東京電力常務)、岡本孝司氏(東京大学大学院教授)、中村多美子氏(弁護士)、西澤真理子氏(リテラジャパン代表)、金氏顯氏(エネルギー問題に発言する会、元三菱重工業)。パネルの概要は3.項に記す。閉会の挨拶は金子熊夫エネルギー戦略研究会会長が行い、約250名の参加者を集め盛会裏に終了した。

2. 葛西敬之氏の基調講演要旨

葛西氏は、旧国鉄時代の経験を振り返り、自分が正しいと信じることを貫くためにリーダーは如何にあるべきかについて、警世の箴言を開陳、参加者の共感を誘った。講演の冒頭で①多数の死者を出した三河島事故や鶴見事故を乗り越えて鉄道の安全運行基盤構築に注力しつつ1964年の東海道新幹線の開通にこぎつけた先輩諸兄の改善努力の足跡と②肥大化した組織の固定費に呻吟し経営

の崩壊寸前にあった国鉄を分割民営化という合理化達成で救った実績を紹介した。この実績に照らして非日常的な厳しい状況下での指導的立場にある者の行動の要諦について、リーダーの覚悟と組織を牽引する覇気と見識、物事を進めるための仲間との連繋の重要性を強調した。

また、輸送サービス事業とエネルギー供給事業との類似性に言及して、公共事業では行政と政治から多くの影響を受けるがサービスの停止は組織にとっても受益者にとっても致命的であり回避せねばならぬと指摘。更に最近のエネルギー危機と原発停止による国富の流出に鑑み、この状況を招いた政治姿勢とマスメディアの報道ぶりについても『東電福島事故で、政権自体がパニックに陥り、それが国民にまで伝播してしまったことは全く不幸なこと。マスメディアは科学的な根拠を示さず放射能の恐怖ばかりを喧伝した。また、大衆迎合主義で原発を全面停止してしまったことは国を誤らせたもので政治史に残る汚点』との指摘を行った。

最後に、原子力の役割について、『原子力発電は安全にマネージできること、放射能とは日常生活の中で共存し有益に活用できるものであること、日本の産業は原子力を活用した安価な電力なしに成り立たないこと』について世界の様々な権威者の知恵も借りて冷静な議論を進めることが肝要であり、現政権は民主党政権時代のエネルギー政策の棚卸をすることが喫緊の課題であると締めくくった。

The 14th Nuclear Symposium hosted by Nuclear Senior Network, Atomic Energy Society of Japan : Hideo HARIYAMA.
(2013年 11月10日 受理)

3. 原子力の信頼回復に係わるパネル討論

パネル討論は、まず小出座長によるテーマ設定の背景説明と討論の視点についてのリマークがあり、続いて各パネリストから各々の経験や立場でのテーマに照らしたキーノートの説明があった。そのあと、座長から信頼回復に関わる様々な論点についてパネリストの意見を求める形で効率的に討論が進んだ。最後に、座長から本日の討論のまとめが示された。以下にこれら討論の要点を列記する。

＜小出座長によるリードリマークの要点＞

英国では国家的緊急時に首相直属の主席科学顧問が専門家の意見を横断的にまとめて政府に科学的助言を与え、それを踏まえて政府が国民へ分かりやすいメッセージを発信する仕組みになっている。日本はこれを学ぶべき。国家的緊急時の際には権威者がまず決断し情報を発信することが重要。正しい情報をタイムリーに出さなければ不安が増幅し科学的に根拠のない流言が拡散し社会が著しく混乱する。科学と社会を結びつけるにはコミュニケーションの視点が重要。信頼回復のためには、情報は誰のために、何のために伝えるのかという根本に立ち返って国民の理解を広める情報提供努力と効果的なコミュニケーションの仕組み作りの知恵と努力が望まれる。

＜各パネリストのキーノートの視点：発言順＞

- －原発の安全性、信頼性向上に取り組んだ歴史と一定レベルで慢心したことの産業界としての反省(金氏氏)
- －東電福島事故の原因・対策・反省の総括と東電としてのこれからの改革の取り組みについて(姉川氏)
- －原子力は一体何が問題か？安全な原発の構築は可能、信頼回復には俯瞰的な粘り強い説明が肝要(岡本氏)
- －原子力関係者は相手との信頼関係を構築する努力を惜しむな。そのために、誰に何を分かってもらいたいかを、そのために何が必要かを真剣に考えるべし(中村氏)
- －安全を安心につなげるために何が必要か？それには真の信頼関係構築が大切。リスクコミュニケーションでは聴く側より伝える側の問題の方が大きい(西澤氏)

＜パネル討論での主なディスカスポイント＞

- －国民目線での原子力界(産業界、行政、規制)や原子力専門家への信頼感が育まらない根本原因は何か？
- －マスメディアの報道姿勢は如何か？断片だけを誇張して、冷静に全体像を把握できる情報を流しているか？
- －国や事業者は国民の立場で不安解消のための打ち手について国民に納得ゆく説明をしているか？
- －イメージや印象論で安全安心を判断する一般市民に対する伝える側の姿勢と努力は果たして十分か？
- －原子力規制委員会の安全判断の硬直性や審査業務の閉鎖性、非効率性が信頼回復の一つのポイントか？
- －産業界のさらなる安全向上に向けた取り組みは？
- －国民のリスクリテラシーの醸成が必要ではないか？
- －信頼回復のための顔が見える対話が重要では？

－メディアの顔が見えないのは不気味では？

－メディアとの付き合い方や情報提供の工夫が必要？

＜小出座長によるパネル討論のまとめ＞

原子力発電所は科学技術の集大成の結晶であるが、大事故を起こしたために社会からの信頼が失墜した。科学技術の問題を社会にうまく伝えることが出来なかったために技術領域を超えて社会の問題が拡大した。原子力の信頼回復のためにはこのトランスサイエンス領域での有効なコミュニケーションを進めることが肝要。このためには現代社会ではリスクゼロはないことを伝え、科学技術には不確実な部分が必ず存在することも市民に理解してもらう努力が重要。そのための新しい手法として、マスメディアではなく、顔の見える範囲を対象としたミドルメディア手法も有効かと期待する。このやり方なら意見対立している問題であってもお互いの意思疎通が容易になり、生活言語で科学と社会をつなぐことがより容易になる。また、分野を超えて理解し合う風土と哲学の醸成とその実践も重要である。

4. シンポジウムを終えての報告者所感

今回のシンポジウムは多彩な登壇者とテーマ設定が時宜を得ていることから大盛会であった。

シンポジウムでは信頼回復のための実践的なリスクコミュニケーションの重要性が指摘された。しかし、「絶対安全でなければ不安全」と感じる感覚的ゼロリスク志向の国民に対するリスクコミュニケーションの定着は容易ではなく、その成果を辛抱強く待つ姿勢も肝要であろうと思量する。原子力エネルギーの利用は資源に恵まれないうわが国にとっては極めて重要であるが、残念ながら国論は割れている。この理由の一つに、歴代の政府が原子力の利活用を強く覚悟し腹を括らなかつたことと、原子力の便益とリスクについて真剣且つ丁寧に国民に説明してこなかったことが考えられる。

更に国民が理解しやすく納得できる原子力発電所の安全目標が設定されていない現状ではリスクコミュニケーションが空回りすることも危惧される。原子力の利用によるリスクの上限を欧米のごとく最悪リスク(死亡リスク)との対比で具体的に示すことが必要ではないだろうか。その上で、これまで真剣にリスクコミュニケーションを実践してこなかった政府行政機関と産業界は怠慢を反省し、真摯な取り組みに注力することが大切である。

著者紹介

針山日出夫 (はりやまひでお)

原子力シニアネットワーク連絡会

対話幹事

(専門分野/関心分野)原子炉保全工学、

核燃料設計製造技術/エネルギー安全保障政策